アコースティックリヴァイブ制作

DSD11.2MHzハイレゾ音源を聴く

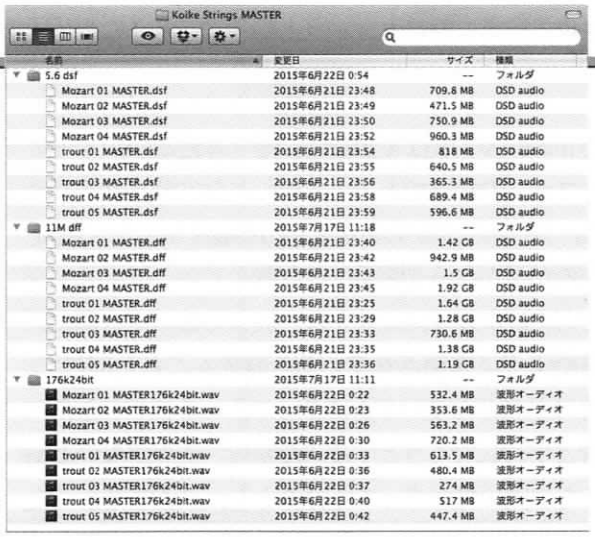
半澤公一

過日のこと，本誌８月号のページを繰っていたとき，あるところで目が釘付けになった．それはDSDによるレコーディングレポート．記事によれば，この録音の大きな特徴はサンプリング周波数11.2MHzの最新フォーマットを用いたところにある．さぞ高品位なサウンドが期待できるだろうと，所用で立ち寄った編集部で話したところ，すでに編集部にそのときの記録音源が届いており，試聴できるチャンスをいただけた．

DACはリリース間もないティアックUD-503を使用し，同機のアナログ出力を試聴室リファレンスパワーアンプのアキュフェーズM-6200に直結した．PCはMacBook Pro，再生ソフトはTEAC HR Audio Playerを使用して，USB接続した．

ソースはPC内蔵SSDの空き容量の都合で「モーツァルト弦楽五重奏曲第４番ト短調」１曲のみとし，記録方式の異なる音源，PCM 176kHz/24bitおよびDSD 5.6MHzとお目当ての11.2MHz，以上の３種類である．まずPCM音源から聴き始めたが，力感があり，空間情報の精度よりも音楽的な要素を前面に出してくるような方向性である．高いサンプリング周波数とビットレートで記録されているが，ただ，どこかに残る硬質感と希薄さを伴う空気感といった，この記録方式が持つキャラクターもわずかながら同時に感じる．

次にDSD 5.6MHzに進んだが，ここでサウンドの世界観が大きく変わる．総じて質感はまろやかに変化．しかし，低域そして高域ともに上下に伸びきり，周囲にある空気を含めて録音場所全体をそのままパッケージしたようなリアルさである．音楽を掴んでエネルギッシュに伝えるというより，ありのままを再現してみせるといったベクトルである．そのため，楽器の発音構造なども克明に感じ取れるが，ただ分析的なもの言いは一切なく，ただただ自然な風景が試聴室いっぱいに広がる．



Koike Stringsの録音データ．DSD 5.6MHz，DSD11.2MHz，PCM176kHz/24bitの３種類

最後にDSD 11.2MHzへとファイルを切り替えたところ，一聴で空間容積が大きく伸張したことに驚いた．また空間の透明度が高く，ことに残響音の消え際まではっきりと聴き取れ，録音行為という電気を介した違和感を感じない．さらに各楽器の倍音成分が豊かで，楽器個々が独立しながらもアンサンブルが成立するさまは，音楽ができあがっていく過程をつぶさに描き出して，サイエンスとアートを両立．貴重な機会を体験でき，加えてこのフォーマットに今後の可能性を強く感じた．

最後に今回レポートするにあたり，微細な部分を拡張しながら述べたことを断わっておきたい．試聴した3種のソースはどれも充分に高品質であり，不満を覚えるようなものは一切なかった．ハイレゾ音源がオーディオの楽しみとして，今後につながる存在価値を秘めていることが伝われば幸いである．

DSD 11.2MHz再生に対応するティアックUD-503

PC再生ソフトはティアックのTEAC HR Audio Playerを使用した